第一章　民　俗

第一節　衣・食・住

概　況

往昔から純農村として推移してきた本町の衣・食・住の風習は世相の変革にともなって変化したのであるが、とくに江戸時代から明治時代に入って、洋風化の影響による変化と、第二次大戦によって大きな変容をし、農村特有のものもほとんど姿を消してしまった。

今日では、経済の高度成長とともに本町にも都市化の波がおしよせ、町民の日常生活の様相は急激に合理的かつ機能的になり、衣食住、冠婚葬祭、年中行事などの多くが変化した。

衣　類

江戸時代から百姓の衣服地はすべて木綿とされ、明治時代に入っても日常では木綿を使用していたが、養蚕、織物が発達するにつれて、絹、毛織物を使用するようになり、昭和一〇年前後には洋服がかなり普及してきた。そして日常着、仕事着ともに着物が多かったが、それでも仕事の時は、男子は上衣に紺か浅黄色のはんてん、腕ぬき、下衣は同じ色のモモヒキを使用した。履物は、ワラぞうり、あるいは少数であったが地下タビ（ハダシタビ）をはいた。

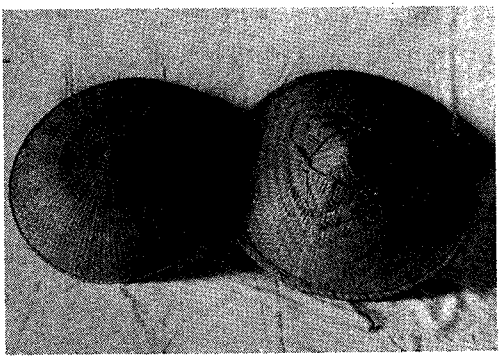

図4－1　笠

ゴムぞうりは昭和一〇年代より、また地下タビは大正末期よりしだいに普及した。作業着が活動に便利な洋服型に移行したのはこの頃であった。

農作業にでる時は、木綿の手ぬぐいで〝ほおかむり〟をしたが、のちになって麦わら帽子をかぶる人もあった。

女子は手には手甲、頭には笠を多くの人がつけた。下衣は、はばきが多く、履物は男子と同様であった。

夏の炎天下では、農作業の折、ショイゴモ(背負菰)といって、ワラで作った日覆いゴモを使用した。女子の作業着で目につくのは、戦時中に奨励されたモンペである。これまでも改良した作業着があったが、モンペはきわめて農作業に便利なことから現在も使用されている。

また冬期の農作業の時は男女とも、昔から寒さにたえるため胴着といって綿入れを着た。

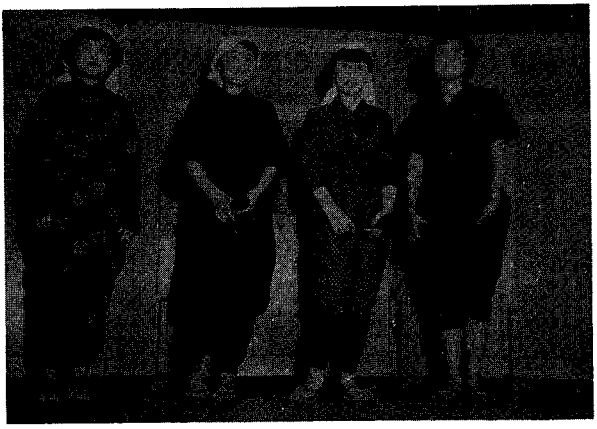

図4－2　婦人の仕事着姿(モンペ姿)

食物

主食は米食ではあったが、麦を混入した〝麦めし〟が多かった。当時の麦は〝割り〟といって、精麦したものを割ったもので、今日のような押麦ではなく、また麦の混入割合は家によって差異があり、三割か四割の家が多かった。またうどん、団子汁(すいとん)、おじや(雑炊)、芋がゆ、干葉めしなども多く食べた。うどんは小麦と換えていた。

回数は三回が通常であったが、田植え、稲刈りなどの重労働の期間には、一日四回あるいは五回にもなった。

朝飯(あさめし)……午前五時～六時頃
茶漬(ちゃづけ)……午前一〇時頃
昼飯(ひるめし)……午後二時頃
ひるから茶づけ……午後五時前後
夕飯(ゆうはん)……午後七時～九時頃
※干葉(ひば)めし……大根の葉を干したものをこまかく刻み麦飯、米飯に入れたもの

副食は自家生産の野菜(大根、かぶら、里芋、人参、ごぼう、ナス、キュウリ、白才、カボチャ、大豆など)を使い、肉類は魚(イワシ、サバ、その他川魚)が多く、自家用の鶏の肉も少々食べた。また魚は塩物、干物が多かった。昔、農村ではイワシを買う風景がよく見られた。五銭か一〇銭位で二〇匹、三〇匹買うこと

図4－3　す し 箱

ができたようである。またとうふ、油揚げなども売りにきた。

このほか、タマゴは自家飼育の鶏の生むものを使い、かなりの御馳走であった。調味料の味噌、タマリはほとんど自家製のものであった。漬物は多く年中食べ、大根漬、梅干、ラッキョ漬が主なものでほとんど自家製であった。また農家では「オカズミソ」といって、こうじ味噌の中へ人参やごぼうをこまかく刻んで入れたものを日常のおかずにした。

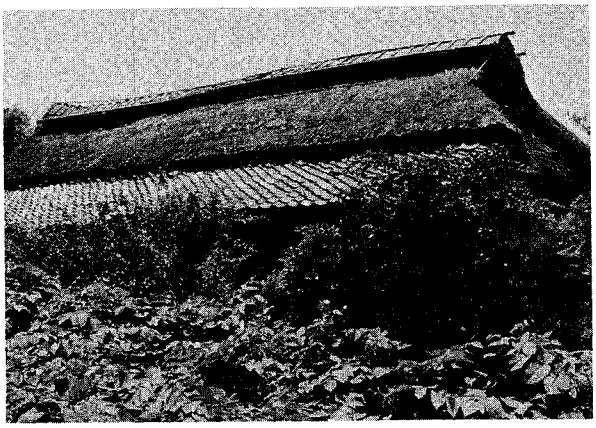

図4－4　かや葺の家(豊田地内)

こうして今日と比べれば非常に粗食であり、とくに肉、魚などは祭日以外はあまり食べることができなかったようである。したがって一年中でお祭りや盆、正月は御馳走をつくり楽しんだ。食事台は多くの家が一人一人の箱膳を使用した。

住　居

一般に農家は寄棟の四間取りが基本とされ、かや葺で間口六間、奥行二間乃至二間半の平屋造りがほとんどであり、庇高は六尺五寸位のものが多く、瓦葺や二階建の家屋は大正時代になってようやく見られた。

一方養蚕がさかんになり農家では、住居と養蚕室が同じであったため大正時代になり家の構えは大きくなった。

昭和一〇年ごろから今日のような、瓦屋根の家もしだいに増加し住居も立派になってきたが、むしろ敷きの間の多い家もかなりあった。また風呂は「五右衛門風呂」で電燈はほとんどなく、毎日風呂に入る家は

少なかった。

燃料はワラをおもに使用し、麦ワラ、豆木、桑枝(桑ボエとよんだ)など農業の副産物や、野山の下伐りをした葉木(ゴーとよんだ)であり、桑株、割り木などを使った時は、その火を消し炭にして火鉢などで使用した。

井戸はほとんど戸外で、流しも戸外式の家が多かったが、昭和になってツルベから手押しの扱上げポンプを使用するようになった。

かまどは昭和になって、土製のものからしだいに煉瓦造りのものが多くなった。

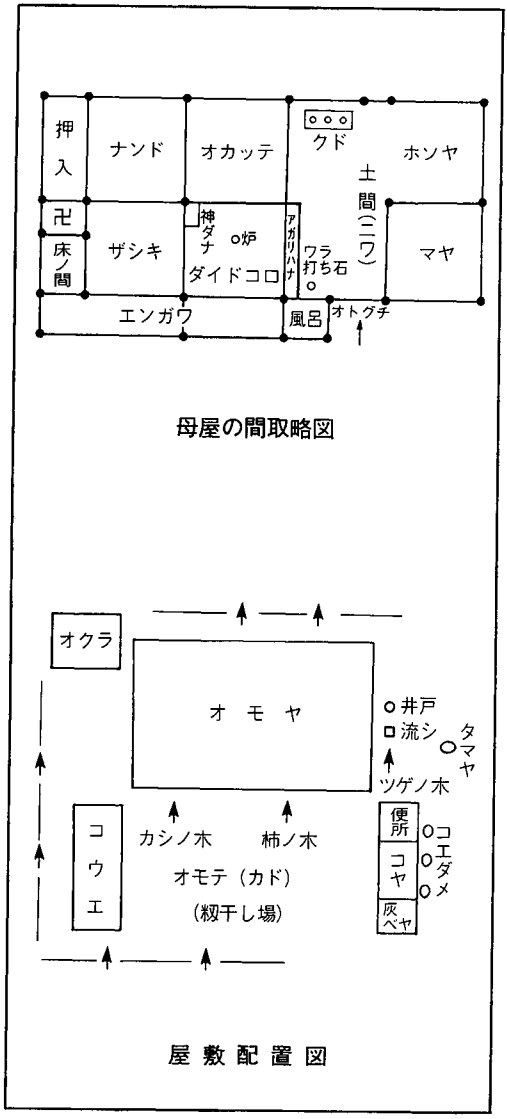

図4—5

※間取りは四・八、六・八と両方あり、主に自作農の家は、四・八、小作農の家は六・八であった。
（四・八……八畳間が四ツ、六・八……六畳二間、八畳二間）

ザシキ――普段はあまり使用せず、客用としてあるいは養蚕に使用した。

ナンド――寝間であり、タンス、長持がおいてある。

ダイドコロ――日常生活の中でもっとも多く利用する。家族の居間で、養蚕にも使用するため中央には炉があった。天井は踏天井で藁や麦カラがしまってあった。

オカッテ――食事をする間で、天井がない家が多かった。

マヤ――土間が多く道具や米、麦などをおもにいれておく間である。

ホソヤ――漬物、味噌、タマリなどが保存され、薄ぐらい間である。

ニワ――夜業をする仕事場で藁打ち石がおかれ、また桑の葉をおく場所ともなった。

コウエ――おもに養蚕用として使用し物置ともなり、一間を寝室として使用するように間取りした家も多くあった。

生　産

米麦と養蚕を主体にした農業であり、ほとんどの田は二毛作が可能であった。畑の多くは桑畑で麦、やさいなども自家用に併せて換金作物としてもかなり栽培されていた。

家畜はもっぱら副業的に養鶏がおもなものであったが、これも一〇〇羽前後の家が多かった。農作業の運搬具はほとんど大八車であったが、昭和七、八年になって、ゴム輪のリヤカーが使用されるようになり、また牛・馬車もよく使われていた。農作業に日常使用したものは、ビク、桑かご、ガゴジ、モッコなど肩で担うもの、背負うものが多くい

ずれも重労働であった。

また生産の道具としてはつぎのようなものが、おもなものであり、今日ではほとんど見られない。

○おもな生産用具

大八車（地車）

明治の初期までは車輪は堅木で作ったものであったが、中期になって金輪になりかなりの量が運搬できるようになった。大八車は大平洋戦争中にリヤカーのタイヤが自由に購入できなかった時代にも多く使用された。

みの

「わら・しゅろ・ござ」などを材料にして編んだ雨具で、昭和三〇年頃まではよく見かけられたが、農業の機械化が進むなかで姿を消した。なかでも「ござみの」は雨天だけでなく真夏の「日よけ」にも多く使用された。

千歯こき（まんが）

これは江戸時代から昭和時代前期にかけ、稲・麦などの脱穀に使った道具である。櫛の歯のように並んだ鉄の刃先へ稲・麦の穂先をひっかけ、手前へ力一杯ひいて穂を落とした。（足踏式の脱穀機は大正末期に出現した。）

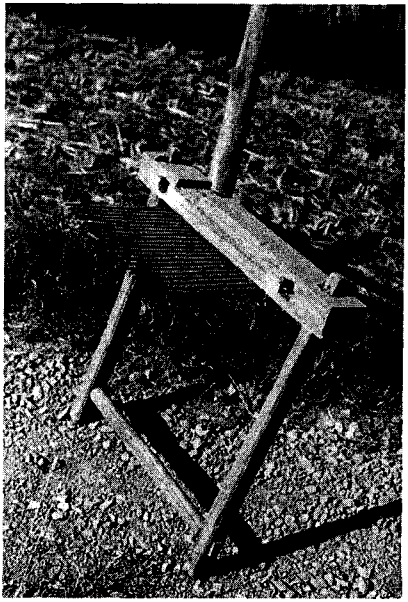

図4－6　千歯こき（まんが）

からさを（麦たたき）

二メートル位の竹竿の先端に堅木の棒材をつけたもので、先棒がくるくる回るようになっている。脱穀した麦穂（大麦が多い）を庭先に干し、この棒で叩いて実を脱粒させた。麦秋になると、農家では麦たたきのバタンバタン（からさをで麦をたたく音）という音がにぎやかであった。

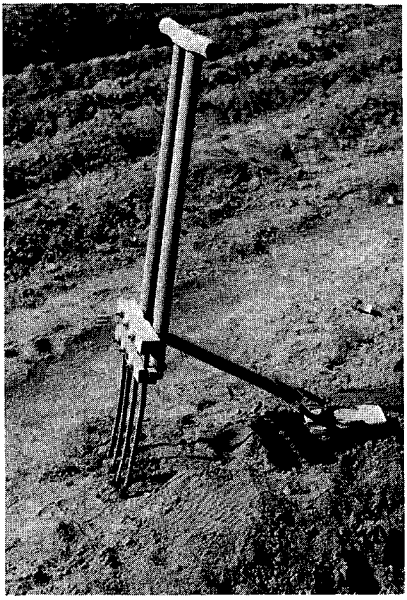

図4－8　麦田起し

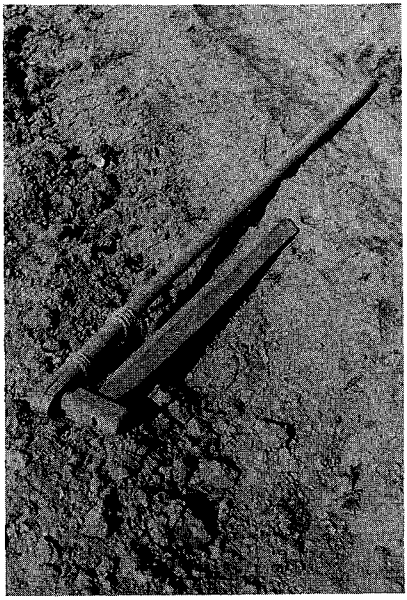

図4－7　からさを

よこづち（木づち）

わら縄やわらぞうりを作るために、稲わらを「よこづち」でたたいて柔らかくした。

木づちともいって材料は、主に栗か樫で堅く重いものが用いられた。

わら細工は雨や雪の日、夜なべ仕事の中心であった。

麦田こわし

大正時代になって多く使われ、昭和年代に入っても戦

後、耕転機が普及するまで農家の主要な道具、備中にかわる田起しの道具として大切にされ、かなりの労力は要したが備中とくらべ作業が進んだ。

糸車と綛つくり

いずれも製糸用具で昔から、昭和初期頃まで家機で布を織るのに使用された。

綿布、紬など原料糸から織上げるまで、こうした道具が使われ、終戦のころまでは多くの農家で見られたが今日ではほとんどなく、民具展などでは昔を語る貴重な道具として親しまれている。

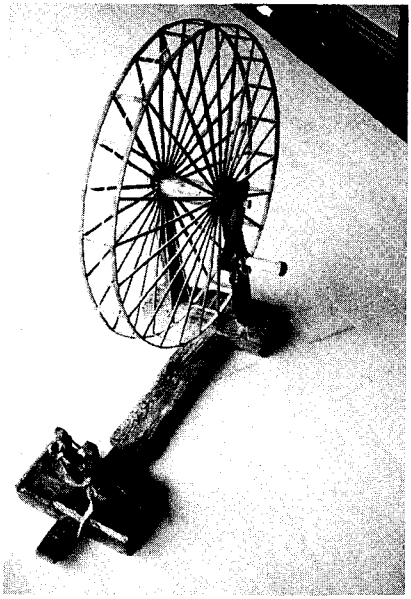

図4－10　道具(糸巻きと綛つくり)

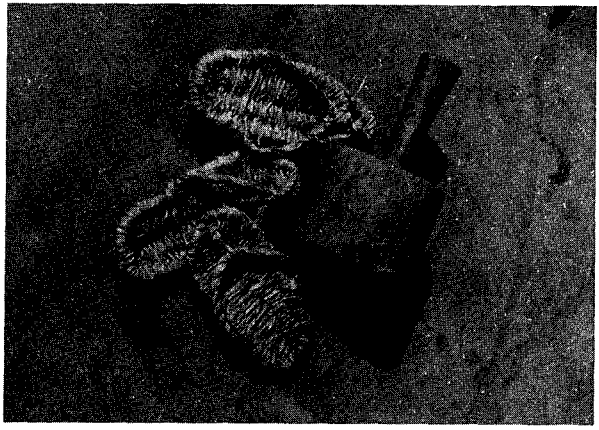

図4－9　つちとわらぞうり

表4－1　生　　産　　暦

項／月	生　産　暦(戦前)	生 産 暦(戦後)	農 耕 儀 礼	生　活　暦
1 月	麦の施肥、耕作 夜なべ(縄ない、びくつくり)	正月菜、ねぎ	七草がゆ	五社めぐり、年頭講 破まや、左義長
2 月	桑畑の施肥、耕作 麦ふみ、土入れ			厄年祝い、節分 山の講
3 月	春蚕準備、麦の耕作 ナタネ、大根種種まき	柿の剪定		ひな節句 弘法さま
4 月	夏野菜種まき 苗床づくり	里芋植付け 苗床づくり		五条川畔桜まつり
5 月	籾まき 春蚕掃立	苗代の準備、籾まき 甘藷苗挿し、	八十八夜の種まき 川ざらえ、苗代づくり	端午の節句 菖蒲風呂、虫干し
6 月	麦刈り、ナタネ、大根種子の 収穫、麦田起し、春蚕上り	水田耕起、水揚げ 田植え		
7 月	田植え、田草取り 水回り、夏蚕の最盛期	田草除草剤使用	虫送り	輪くぐり
8 月	夏蚕上り、ナス、キュウリ、 トマト、スイカ、トウモロコシなど収穫	追肥、ヒエ切り		七夕まつり、お盆 氏神、墓掃除
9 月	晩秋蚕掃立、水田の雀おどし 川のかえどり	水落し、田干し	二百十日、二十日 の厄日	お月見、お彼岸
10 月	大豆(あぜ豆)収穫 甘藷掘り	甘藷掘り、稲刈り、 米の調整		氏神秋祭り えびす講
11 月	稲刈り、脱穀、籾干し、 麦まき、耳つけ(うねつくり) 大根つけ物、切り干し作り	稲刈り、籾乾燥、調整、 出荷、里芋収穫、大根、白 才など収穫、漬物づくり		七・五・三 神送り
12 月	米の籾ずり（調整） 夜なべ、年貢納め 餅つき、大掃除	米の出荷 餅つき、大掃除	秋上げ 門松たて 鏡餅かざり	冬至、秋上げぼた餅 正月用品買入れ 大晦日 除夜の鐘